

中国での鳥インフルエンザ ～中国政府の対応と日本への影響について～

中国政府はH7N9型鳥インフルエンザについて感染拡大を封じ込めたと発表し、すべての警戒態勢を解除した。7月10日現在で感染者133人、死者43人を記録した一連の出来事を振り返ってみたい。

●事の発端と発生の経過

中国は2013年3月31日、H7N9型のヒトへの感染を発表した。当初の感染者数は3名で、発熱や咳の後、肺炎や呼吸困難となったと報告されている。感染者の発表は4月中をピークにして落ち着きを見せ、5月10日には早々に上海市で警戒態勢が解除された。

感染者の77%に、鶏を含む動物との接触歴があったが、そのうち養鶏業の関係者はわずかで、都市の高齢の男性に感染が多かった。

●「家きん」での発生の状況

家きんでの発生は下図の青色で塗ったエリアで、4月4日～5月21日までに20例が報告された。

中国の各省が殺処分や移動制限を中心に大規模な対策を取るなか、5月13日には、チベット自治区でH5N1亜型の高病原性鳥インフルエンザも発生した。中国では今、複

数種の鳥インフルエンザウイルスが存在しているといえる。

●日本国内での発生

日本国内では、3月にオオハクチョウからA型ウイルスの遺伝子陽性の報告があったが、調査の結果、ウイルス本体は見つからなかった。その後6月3日に宮崎県の種鶏場でH5型の抗体確認の発表があったが、ここでもウイルス本体は確認されず、症状も見られなかった。

5月6日にはH7N9型が人の「指定感染症」に指定された。これはSARS、H5N1型に続く指定で、患者の強制入院や就業制限などの措置が含まれる。大型連休の帰国者に備えた異例の緊急措置であった。

また6月7日には発生時対策の行動計画が決定された。これは国民の25%が、8週間にわたって、順番に感染することが想定されたものだった。



●社会的な影響

一方、中国政府は家きんの検査と生鳥市場の規制を進め、中国全土で5万カ所近くのサンプリングを行った。ヒナの処分や出荷停止による損害は580億円、鶏肉消費の落ち込み等による間接的な損失は2,030億円以上にのぼると試算もある。このように大きな問題では、情報公開や対策にも国家的な判断が関与していると見られる。

中国は2002年のSARS発生時、3か月間にわたって発生の事実を公表しなかったが、今回は定期的に情報開示を行った印象がある。しかしその広大な国土では、認知されていない現象もあると考えられる。

日本国内では、今回の影響とみられる鶏病の発生や消費の落ち込みはさしいわい起きていない。しかし中国は、渡り鳥が鳥インフルエンザを運ぶ経路にある。今後、渡り鳥によるウイルスの飛来を想定し、農場防疫を継続したい。

コスト削減のための方策 ～飼料要求率改善の取り組み～

飼料コストを抑えるために何が必要か。その重要な指標となるのが、農場における飼料要求率(FCR)だ。ここでは、給餌器の調整によってFCRが低減した事例を交え、飼養管理面からの改善策を考えていこう。



●飼養管理から考える

2013年第2四半期の飼料価格は値上げとなり、なかなか市場価格が下がることはない。こうした状況のなかで、生産農場にはできるだけ飼料コストを抑えて利益を増やすことが求められるが、安易に安価な飼料に切り替えることは発育を遅らせたり、肉質を低下させたりしかねない。そこで、飼養管理面から考える取り組みを確認しておこう。

●農場飼料要求率

農場における肉豚の生産効率を図るための指標に飼料要求率(FCR:Feed Conversion Ratio)がある。これはある期間の飼料消費量(子豚用・肉豚用に加えて種豚用も含む)を肉豚の増体量で割った数値のことで、「肉豚の増体1kgに対して何kgの飼料を必要としたか」を表す。日本SPF豚協会の発表した12年度の認定農場の成績のなかで、FCR(一貫生産農場)を見てみると、最高値は「2.71」、最低値は「1.07」であった。これは肉豚1頭あたり107kgの飼料が余計に必要だということになる。母豚100頭で年間

2,300頭の肉豚を出荷した場合、農場全体で年間およそ250t分の飼料費が余計にかかる計算になる。

●飼料の無駄はどこに潜んでいるか

農場にはさまざまな部分に無駄な飼料が潜んでいる。例えば「給餌器」だ。床にあふれるほど飼料が出すぎたり、スノコの下に山ができていたりしないだろうか。給餌器に穴が空いたり、そこが排泄場所になったりしていないだろうか。床にあふれている飼料、もしくは糞尿で汚れている飼料を豚は食べない。バラタンクに古いエサがこびりついている状態も避けるのが肝心だ。

また、発育に合わせて適切な飼料を与えることも重要である。余分な栄養を与えていないか切り替え時期を今一度確認しよう。

さらに、死亡豚や未稼働母豚は無駄な飼料を食べていると考えよう。豚は生後間もない頃こそFCRが「1」程度だが、肥育の後半になると「3.5～4.0」となる。そのため、出荷が遅れて大きくなりすぎた肉豚も、無駄に飼料を消費している。

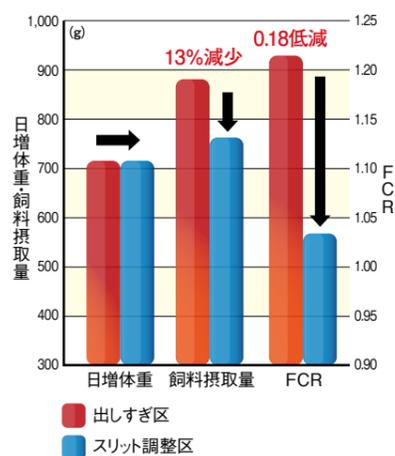
ネズミの存在も見逃せない。ネズミは1日におよそ15gのエサを食べるとされ、仮に農場に1,000匹いるとすれば、年間5.5トンの飼料がネズミに「盗食」されていることになる。

●給餌器の調整でFCR改善

子豚や肥育豚用の給餌器はさまざまなタイプが販売されているが、



飼料があふれた給餌器(上)と、適正にスリット幅が調整された給餌器(下)



一般的な箱型給餌器を使っている農場は依然多いようだ。このタイプの給餌器はスリット幅を調節することにより、飼料の出方を変えることができる。スリット幅を広げれば飼料を食べられないことはないが、こぼしが多くなる。一方、狭すぎれば飼料が詰まって豚が十分に食べられない場合がある。スリット幅は給餌器の受け底部分が半分程度見えるような状態が好ましい。実際にスリット幅を適正にした場合と、出すぎの場合をFCRで比較したところ、適正なスリット幅にするだけでFCRが「0.18」も低減した(図参照)。コストをかけず、給餌器を調整するだけでも、FCRは改善できるのだ。

